

1968年5月学生運動の嵐

——50周年における再評価

近畿大学 山下雅之

この年に書かれた『「5月革命」論』でアンリ・ルフェーヴルはこう述べている、「ヘルベルト・マルクーゼおよび1968年5月の彼の短いパリ滞在に立ち戻ってみることは手遅れではない。激動の一週間の初めに到着した時、・・・彼はまだ、彼の周りで、彼の名と彼の威信によって展開しようとしている運動を知らなかったのである。ユネスコで、ある国際会議が、マルクス主義思想を究極的にアカデミズムの中にはめ込もうと試みた。ある厳粛な記念式典のあいだに、マルクスおよびその著作に防腐処置が施されたのである。・・・」

この同じ日々の中に、学生運動が歩みを開始した。ところで、その進路は、象徴的に眺められるならば、直ちに、バリケードによって荒らされた街頭に似てくる。その運動は、諸々のイデオロギー的な残骸のまっただ中を通るのである。あの焼けた骸骨は？それは公認マルクス主義に似ているが、もはや何ら粹なところがない・・・」（森本訳、筑摩書房、24頁）。

パリで、日本で、数年前のバークレーで、ベルリンで学生たちが猛威をふるったこの学生運動とは一過性の青春の嵐だったのか、不満を募らせた若者たちの反抗のパワーだったのか、真の社会変革を目指す国際的な政治運動だったのか？それによって何が変化したのか／しなかったのか？嵐のあとにカルチュラタンは静けさを取り戻し、学生たちはソルボンヌの講義室に舞い戻っていったのだが。

マルクーゼと並び68年のもう一人の教祖的思想家と言われるヴィルヘルム・ライヒは1930年代の著作でこう述べている、「全世界の革命派は消耗的闘争を多様な戦線で推し進めなければならないが、この闘争は、人間の生活を革命派のイデオロギーの立場だけから観察したり、社会的生活の中で革命派の思想と闘争にとにかく近い・・・ような事実だけに注目したりする結果に革命派を引き入れがちである。ところが世界の人民の大多数——革命派の闘争が役立つとするのは、資本主義的抑圧の桎梏からのこの人民の解放であるにもかかわらず——は、革命派の闘争や苦悩や思想にほとんど通じることなしに、自分自身の束縛された生存を多少とも無意識的に続け、こうして資本の支配を支えている」（『階級意識とは何か』、三一書房、9頁）。

人々は資本主義に欺かれ無意識の抑圧を受けており、階級意識を取り戻し連帯して闘かおうとマルクス主義的スローガンを振りかざした若者たち、それは本当に社会的な闘争だったのか？日本では彼らの多くが70年代以降の経済成長を支える大卒サラリーマンあるいは技術者として発展の原動力を担ったとするなら、それは社会を変革するどころか社会をより強固にし、革命を押しえつけ、資本主義を加速するものだったのではないか？抑圧、桎梏、束縛、支配、疎外、物象化、闘争、解放、革命・・・68年を中心に展開された学生運動はこれらのキーワードから織り成された特異な言説を核に展開された文化的な闘争だったとすればその射程はまた違ったものとなる。たとえ政治的社会的風景に何一つ目ぼしい変化をもたらすこともなく学生たちの覇気が雲散霧消したとしても。ライヒやマルクーゼ、吉本隆明を読み学生たちは何に怒りを感じ、何から抑圧をはねのけようとしたか？大学解体や帝国主義打倒の文字は無意味な呪文だった？

「(5月25日午前) 零時半、CRS (機動隊) を主力とする警官隊は、サン＝ミシェル大通りにバリケードを作り占拠中の学生に対して排除活動を開始した。その頃までにサン＝ミシェル一帯には5つのバリケードができ上がっており、うち、クリュニー中世博物館横、エコール通り、ソルボンヌ広場入り口の4つのバリケードがとくにその高さや堅牢さを誇っていた。警官隊はセーヌ寄りから攻撃に移った。まず、強力な催涙弾攻撃をおこなう。・・・午前2時までに4つのバリケードが警察側の手に落ちた」（『5月のバリケード』、早川書房、204頁）。